

54. ヒラメ *Paralichthys olivaceus* (Temminck and Schlegel) 図版21

英名 Japanese flounder

露名 ロージヌイ パルトゥス  
ложный палтус

地方名(北海道) アオツパ、テックイ、テツクイ、ウマ (大型魚)

漢字 ひらめ  
平目、鯧

アイヌ語名 ニナ、ウッタ、ヒベヲ、オヤトゥヨ、シタンタカ

【形態】 体は長楕円形で強く側扁\*し、両眼は左体側にある。頭の背縁は上眼の前方でわずかにくぼむ。口は大きく、上あごの後端は眼の後縁よりも後方に達する。両あごの歯は犬歯\*状で強く、1列に並ぶ。尾びれ後端中央はややとがる。うろこは小さくてはがれにくく、有眼側\*が櫛鱗\*、無眼側\*が円鱗\*。有眼側の体色は暗褐色で、黒と白の斑紋\*が全面にある。無眼側は白色。最大で全長\* 1 mを超える。

【生態】 ヒラメ属\*は19種\*が知られ、そのうち太平洋西岸にはヒラメ1種のみが分布する。生息域はサハリン、千島列島、朝鮮半島周辺、東シナ海、香港までの沿岸域。国内では沖縄県を除くほぼ全域の沿岸。北海道では日本海から津軽海峡に多く、東部の太平洋やオホーツク海にはほとんどみられない。

ヒラメの移動範囲は、春に浅みに秋から冬には深みにという程度であり

広くないとされているが、長距離を移動した例も少ない。北海道北部の日本海側に位置する遠別沖で標識放流\*されたヒラメは、放流した海域の近くで再捕\*されるものが多いが、石狩湾、岩内湾や寿都沖に移動して再捕されたものもある。

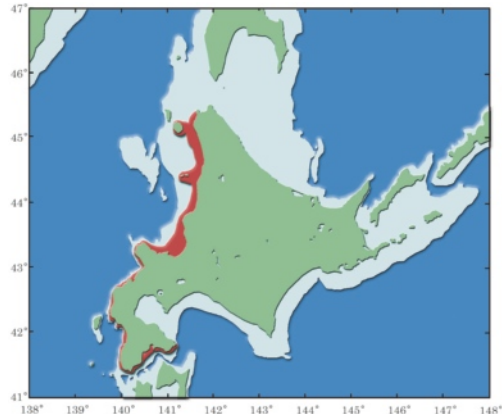
積丹半島、能登半島などの地形的な境界で系群\*が分かれているとする説もあるが、それぞれの海域に分布する集団が互いに交流せず完全に隔離されているわけではない。

産卵の適水温は15～18℃であるため、産卵期は海域によって異なる。九州南部で1～3月、九州北部で2～4月、鳥取沿岸から若狭湾で3～4月、富山湾で4～5月、新潟から秋田で5～6月、津軽半島沿岸で5～6月、石狩湾では6～8月と北ほど遅い。産卵場は主に50mよりも浅い所で、岩礁地帯周辺の砂泥域や砂れき\*域である。産卵期間は2～4カ月におよび、この間に1尾の雌が何度も卵を産む。全長43～46cmの雌で最大48万～66万粒を1回に産み出し、1産卵期間中に1尾の雌が合計で800万～1,150万粒の卵を産む。

卵は直径約0.9mmの球形、分離浮性卵\*で、直径約0.13mmの油球\*を1個持ち、囲卵腔\*が狭い。卵の発生は水温10～20℃、塩分\*26～50psu\*で進み、最適値はそれぞれ15℃、34psuである。

受精からふ化までの時間は、10℃で約165時間、20℃で約33時間。産卵数\*が多いことから、産卵期に漁場となる海域には多量のヒラメの卵が浮遊していると考えられる。

水産資源の変動予測や管理のうえで、産卵量や卵の分布、移送、生残は重要な情報であるが、ヒラメではこれらに関する研究があまり進んではいない。その大きな理由は、卵から種を特定するのが難しいためである。ヒラメの卵は卵黄や卵膜\*の表面に特徴的な構造がなく、天然海域においてごく普通に数多くみられるタイプの魚卵であることから、種の識別が採集直後の卵でも難しく、ホルマリン溶液などで固定された卵ではほとんど不可能であった。しかし近年、ミトコンドリアDNA\*を用いた識別法が開発され、研究の進展が



北海道におけるヒラメの漁場



1



2



3



4

#### 変態期のヒラメ仔魚

- 1 : 背びれ前部の鱗条きじょうがとさか状に伸び  
体高が増加 (全長8.7mm)
- 2 : さらに体高が増し背びれ、尻びれが  
発達 (全長9.1mm)
- 3 : 右眼が上方へ移動し始める (全長9.3  
mm)
- 4 : 右眼が体の左側に達する (全長12.9  
mm)

期待される。

ふ化直後の仔魚しぎよ\*は全長2.4~2.9 mm、眼は体の両側にあり、海中を浮遊する。その後、全長5 mm前後から背びれ前部の鱗条きじょう\*がとさか状に伸び、全長8 mm前後で体高みせ\*が増し、右眼は上方へ移動し始める。右眼はその後、背中線を越え左体側に達する。そのころ伸びていた背びれ前部も収縮し、全長14mm前後で親とほぼ同じ形となるが、これらのサイズは水温などの条件によって変化することも知られている。このように、体の構造が劇的に変化する変態へんたい\*と呼ばれる過程を経過し、変態が完了するころに浮遊生活から着底ちかぞ\*生活へと移行する。

ふ化直後の仔魚が水深25m付近に多く分布することから、そのような水深帯でふ化すると推測される。浮遊期の仔魚は、日本海側では対馬暖流つしま\*の陸側に広範囲に分布し、岸から70kmの地点でも確認されたことがある。発育初期には沿岸から沖合まで広い範囲で見つかるのに対し、発育が進むと主に岸の近くや内湾域で採集されるようになる。遊泳力の乏しい変態期の仔魚は、鉛直移動ちようせき\*によって生息する深度を変え、潮汐によってできる岸に向かう潮流に乗って岸近くまで移動する。石狩湾では7月下旬から8月にかけて沿岸域に稚魚なまこ\*が着底する。

満1歳時の全長は、能登半島以北で20cm前後、山陰で約24cm、九州西岸で27cm以上と、南ほど成長が良い。2歳ないし3歳以降は、雌の成長が雄を上

回る。初めて性成熟\*を迎える年齢は雄で1～3歳、雌では2～4歳で南ほど若い。その全長はいずれの海域でも雄で約30cm、雌で40cm台である。まれに1mを超え、北海道南部の知内町<sup>しりうち</sup>では1997年11月に全長108.7cm、体重17.9kgの雌が定置網で漁獲された。

餌は、仔魚期には成長とともにカイアシ類\*のノープリウス\*幼生\*から尾虫類\*に変化し、着底期にはアミ類\*へと変わる。全長50mm前後からはほかの仔魚や稚魚も捕食し、未成魚\*や成魚\*では魚類やイカ類などを主に食べる。石狩湾ではイカナゴ、カタクチイワシ、スルメイカなどが餌となる。